

2 研究の実際 > (3) ピア・メディエーションに関する活動プログラム

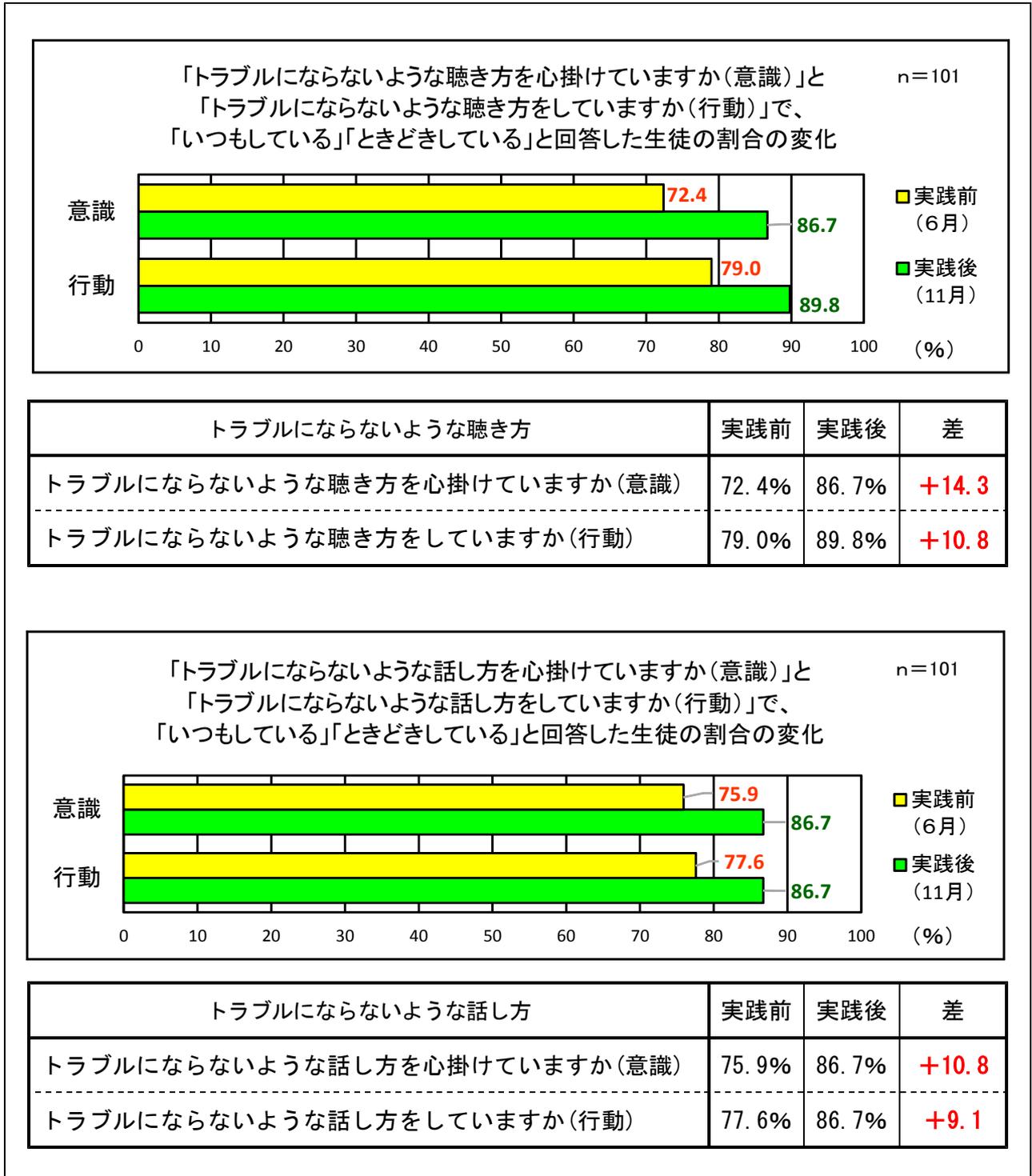
オ 活動プログラムの検証

(ウ) 検証結果<高等学校>

【検証の視点Ⅰ】トラブル未然防止に効果があったか

a トラブルにならないような聴き方や話し方についての生徒の意識と行動の変化

(「ピア・メディエーションに関する活動プログラムの学習についてのアンケート」結果より)

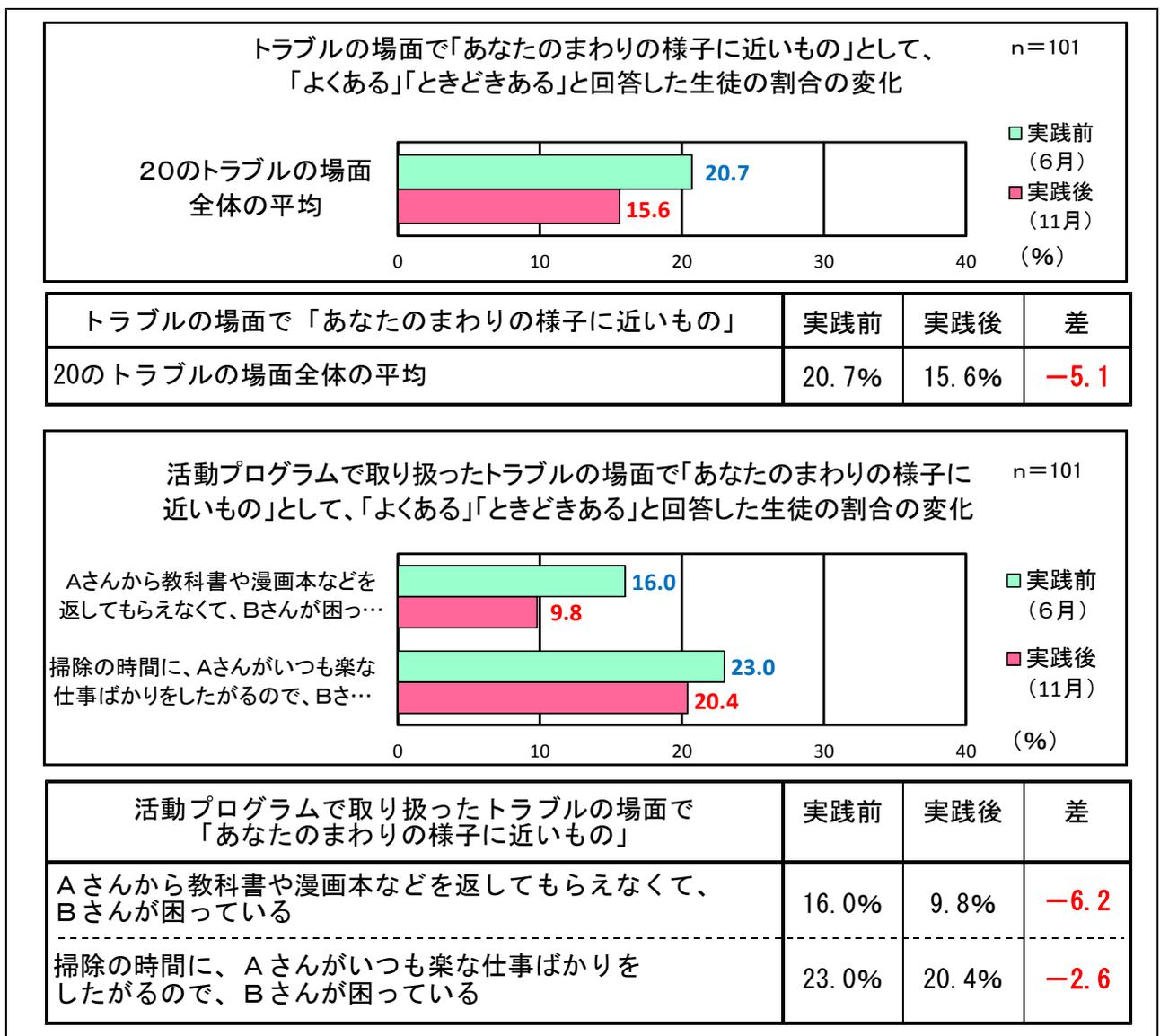


資料1 トラブルにならないような聴き方や話し方についての生徒の意識と行動の変化

- 「トラブルにならないような聞き方を心掛けていますか（意識）」と「トラブルにならないような聞き方をしていますか（行動）」の質問に対して、「いつもしている」「ときどきしている」と回答した生徒の割合が上がりました（前頁資料1）。
- 「トラブルにならないような話し方を心掛けていますか（意識）」と「トラブルにならないような話し方をしていますか（行動）」の質問に対して、「いつもしている」「ときどきしている」と回答した生徒の割合が上がりました（前頁資料1）。
- トラブルにならないような話し方のスキル学習においては、授業で生徒にとって身近な具体的な場面を用いたモデリングの視聴や、話し方のポイントを使った台詞づくりを行ったことにより、数値が好転したのではないかと考えます。また、高等学校においては、トラブルにならないような聞き方のスキル学習は聞き方のポイントの紹介のみではありましたが、生徒がトラブルにならないような話し方のスキル学習を通して相手を意識したコミュニケーションの理解を深めたことにより、聞き方のスキルについても理解を深める効果があったと考えられます。

b 学級におけるトラブルの頻度の変化

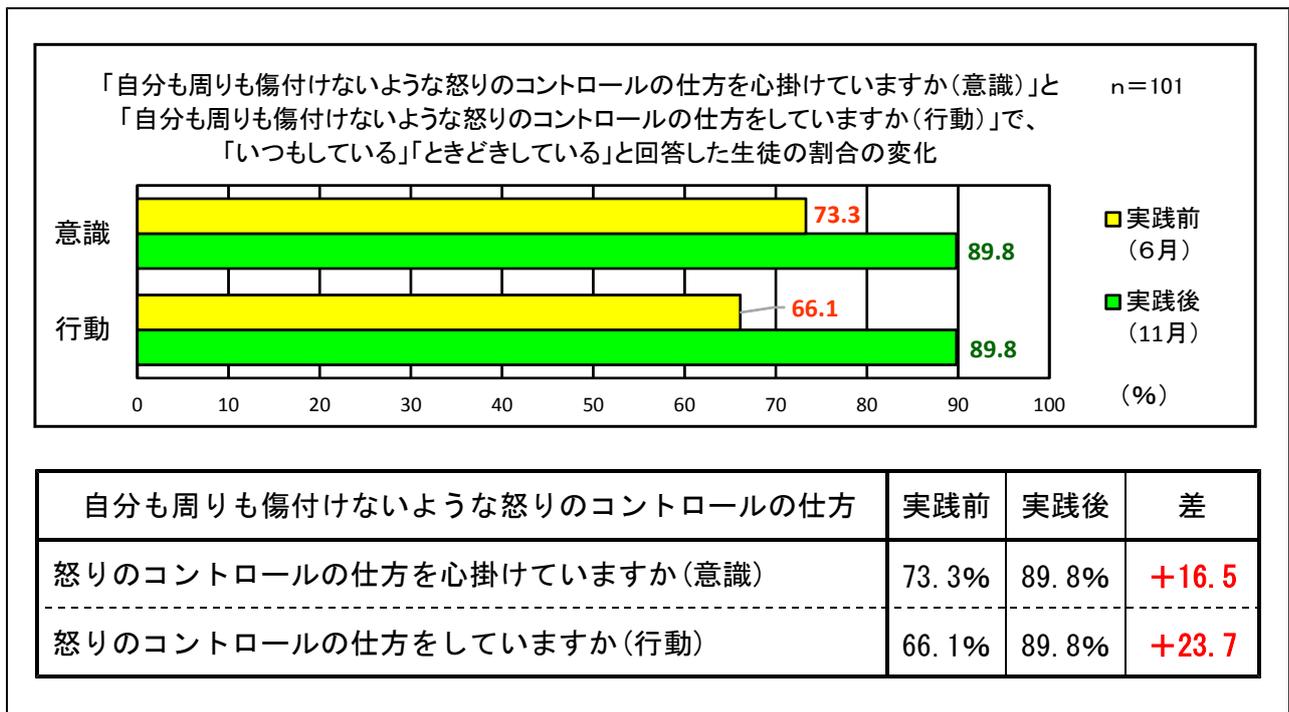
（「トラブルについてのアンケート」結果より）



資料2 トラブルの場面で「あなたのまわりの様子に近いもの」として、「よくある」「ときどきある」と回答した生徒の割合の変化

- 20のトラブルの場面のうち「あなたのまわりの様子に近いもの」として、「よくある」「ときどきある」と回答した生徒の割合が5.1ポイント下がりました（前頁資料2）。
- 活動プログラムで取り扱った2つのトラブルの場面については、どちらもポイントが下がりました（前頁資料2）。特に「Aさんから教科書や漫画本などを…」の場面については、授業でトラブルにならないような話し方のモデリングを提示したことで、生徒が同じような場面での話し方を意識するようになり、トラブルが減ったと感じていることが考えられます。
- これらのことから、授業で生徒にとって身近で具体的なトラブルの場面を用いてモデリングの提示を行うことは、スキル学習の効果を高めることにつながると考えます。

c 自分も周りも傷付けないような怒りのコントロールの仕方についての生徒の意識と行動の変化
 （「ピア・メディエーションに関する活動プログラムの学習についてのアンケート」結果より）

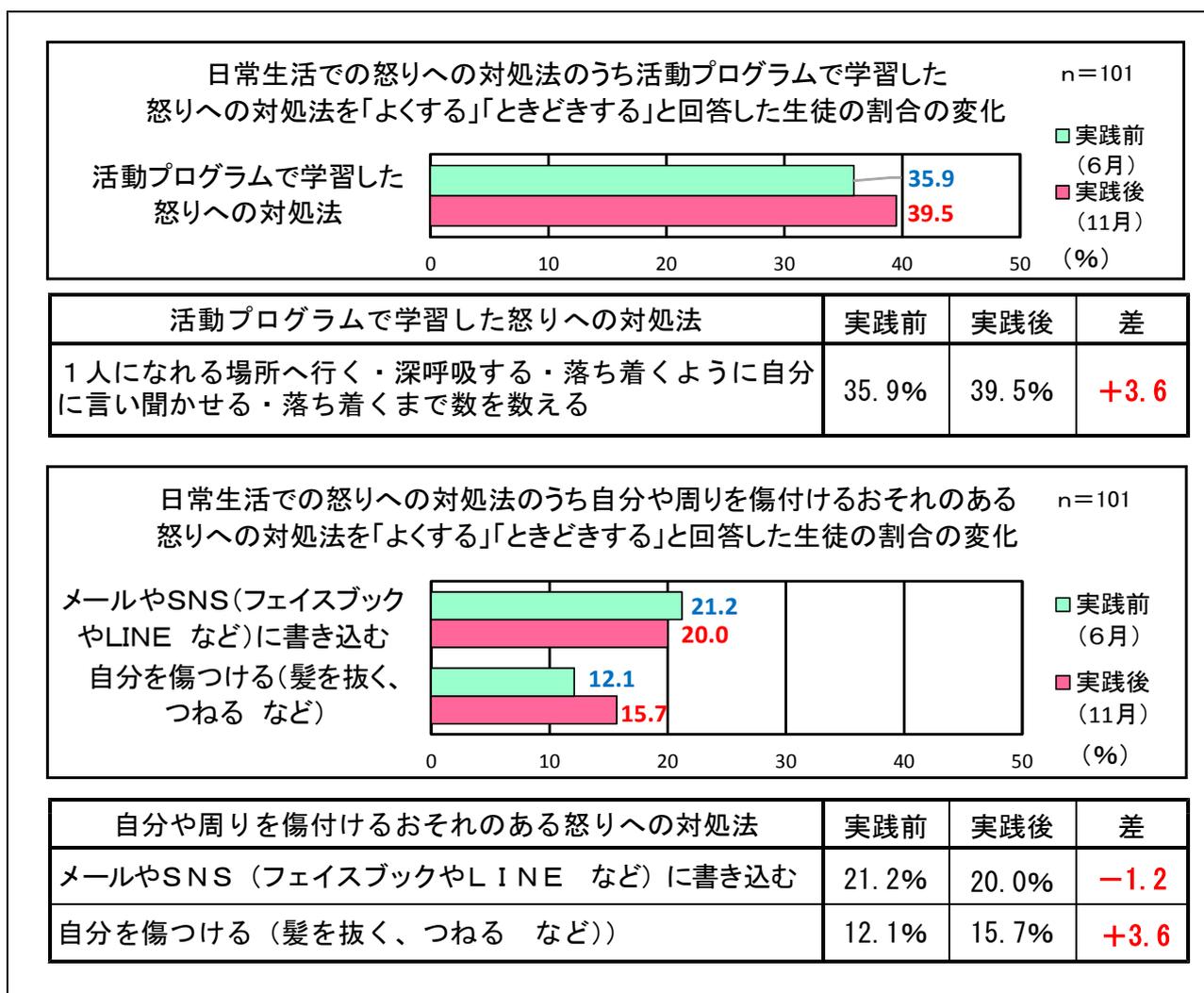


資料3 自分も周りも傷付けないような怒りのコントロールの仕方についての
 生徒の意識と行動の変化

- 「自分も周りも傷付けないような怒りのコントロールの仕方を心掛けていますか(意識)」と「自分も周りも傷付けないような怒りのコントロールの仕方をしていきますか(行動)」の質問に対して、「いつもしている」「ときどきしている」と回答した生徒の割合が上がりました（資料3）。
- 高等学校においては、活動プログラムの「怒りについて知る」の学習内容を1時間で実施したため、自分も周りも傷付けないような怒りのコントロールの仕方については学習時間を12分しか確保できませんでした。しかし、学習後には約9割の生徒が自分も周りも傷付けないような怒りのコントロールの仕方を意識したり行動につなげたりしていることが分かり、学習の効果を確認することができました。

d 日常生活での生徒の怒りへの対処法の変化

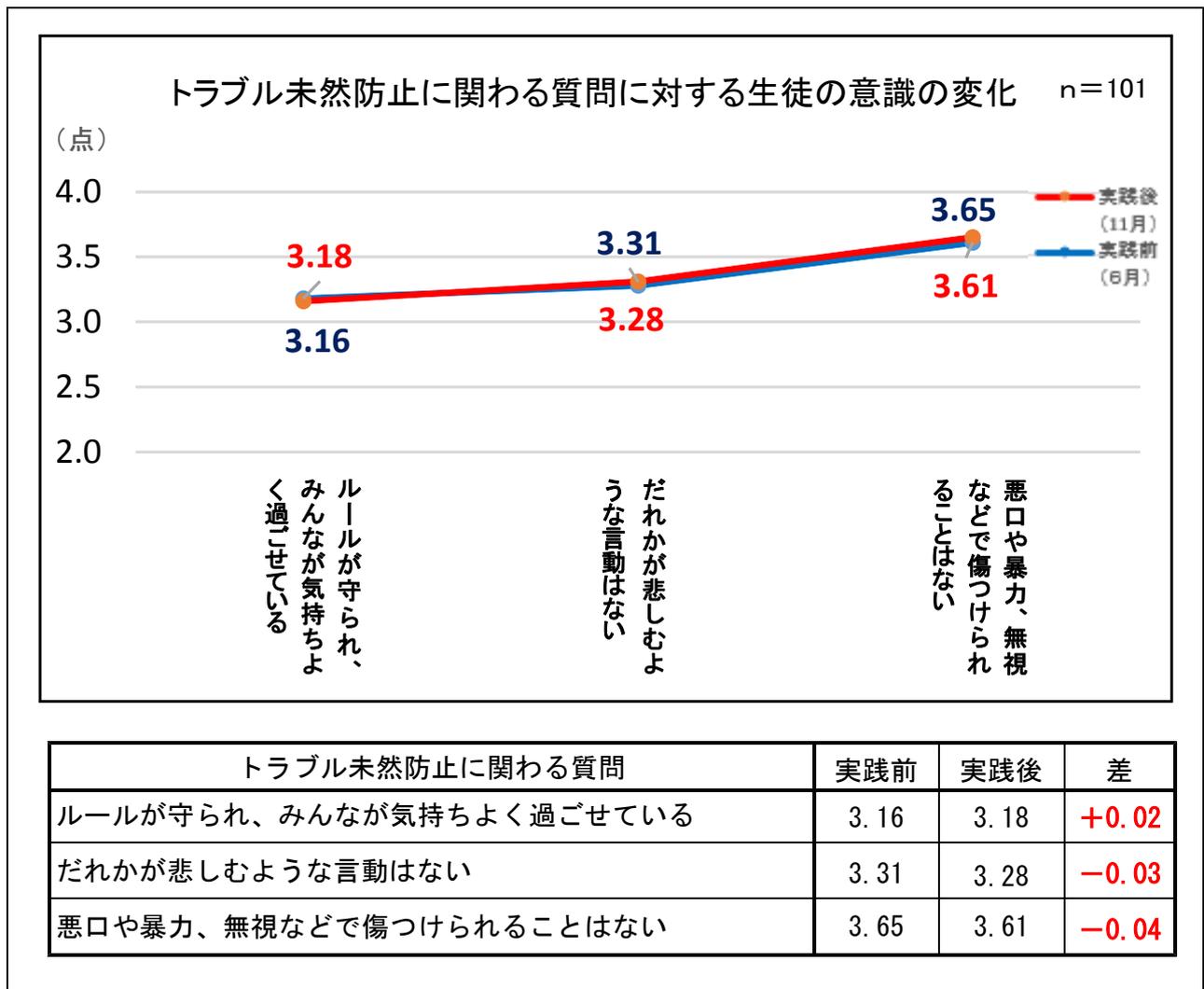
(「トラブルについてのアンケート」結果より)



資料4 日常生活での怒りへの対処法のうち「よくする」「ときどきする」と回答した生徒の割合の変化

- 日常生活での怒りへの対処法のうち、活動プログラムで学習した主な怒りへの対処法（1人になれる場所へ行く・深呼吸する・落ち着くように自分に言い聞かせる・落ち着くまで数を数える）については、「よくする」「ときどきする」と回答した生徒の割合が3.6ポイント上がりました（資料4）。
- 日常生活での怒りへの対処法のうち、自分や周りを傷付けるおそれのある怒りへの対処法である「メールやSNS（フェイスブックやLINE など）に書き込む」は1.2ポイント下がったものの、「自分を傷つける（髪を抜く、つねる など）」は3.6ポイント上がりました（資料4）。
- これらのことから、日常生活での怒りへの対処法については、学習の効果が感じられるものの、生徒が自分も周りも傷付けない対処法を行うことができるように、学習した内容を授業後も継続して取り扱っていく必要があると考えます。

e トラブル未然防止に関わる質問に対する生徒の意識の変化
 (「がばいシート」結果より)



資料5 トラブル未然防止に関わる質問に対する生徒の意識の変化

- トラブル未然防止に関わる質問のうち、「ルールが守られ、みんなが気持ちよく過ごせている」は0.02ポイント上がりました。一方、「だれかが悲しむような言動はない」は0.03ポイント、「悪口や暴力、無視などで傷つけられることはない」は0.04ポイント下がりました。(資料5)。
- このことから、活動プログラムで学習したトラブル未然防止のスキル学習が、より良い学級の雰囲気や友達との関係づくりにつながるように、学習した内容を授業後も継続して取り扱っていく必要があると考えます。

f 活動プログラム実践後の生徒と教師の感想

(「ピア・メディエーションに関する活動プログラムの学習についてのアンケート」結果より)

高等学校2年生

どらやったさ怒りも、コントロールが出来るのが良かった。
 相手のことをめがさ先に話かけてもらいました。

学習後、相手のことをより考へ発言、行動をするようになった。
 トラブルが起らないように心がけていきたい。

資料6 活動プログラム実践後の生徒の感想

- ・授業直後の生徒の反応は良かった。しかし、期間をおいた後に4つのポイントを覚えているかを確認したところ、答えられない生徒もいたため、定期的に声掛けをする必要があると感じた。
- ・トラブルにならないような話し方や聴き方は、すぐに日常で実践できるスキルだと思う。高校生活の中ではもちろん、社会に出てからも応用できるという意味で、この活動プログラムの中で高校生に最も身に付けてほしいスキルである。トラブルになりそうな場面だけでなく、日常のあらゆる場面で、アサーティブな表現ができるようになってほしい。
- ・理論だけ学習しても、実際の場面で使うことができなければ意味がないため、継続して練習する場が必要である。

資料7 活動プログラム実践後の教師の感想

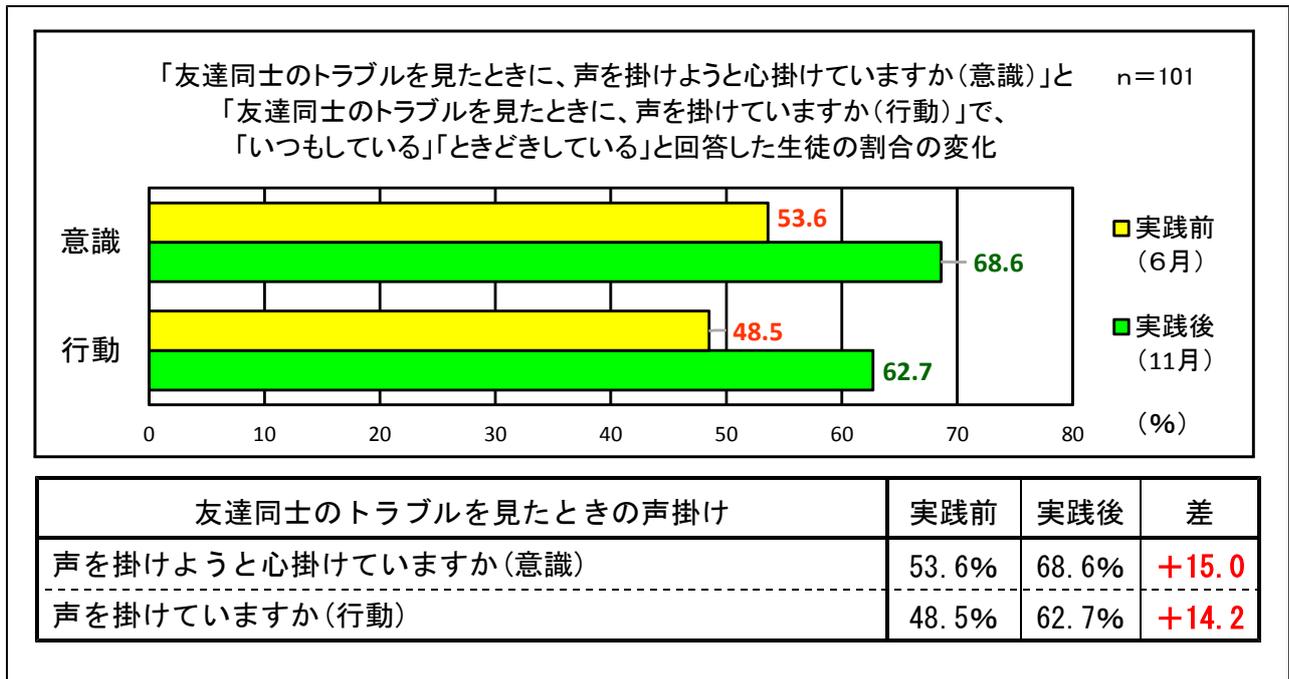
○活動プログラムの学習の前後で、生徒が学習した怒りへの対処法を今後に生かしたり、トラブルにならないような話し方や聴き方を心掛けることにより、トラブルが起きないように心掛けたりしていることが分かりました(資料6)。また、より良い人間関係を築く上で、高校生活だけではなく社会に出てからも、トラブルにならないような話し方と聴き方のスキルを学習する必要があるという教師の感想から、この活動プログラムが生徒の支え合う人間関係を築くために有効であることが分かりました(資料7)。

以上のことから、自分も周りも傷付けないような怒りへの対処法やトラブルにならないような話し方と聴き方のスキル学習は、より良い学級の雰囲気や友達との関係づくりのために有効であり、トラブル未然防止に効果があったと考えられます。また、トラブル未然防止の効果を更に高めていくために、学習した内容をトラブルになりそうな場面だけではなく日常の場面でも継続して取り扱っていく必要があると考えます。

【検証の視点Ⅱ】トラブル解決に効果があったか

a 友達同士のトラブルを見たときの声掛けについての生徒の意識と行動の変化

(「ピア・メディエーションに関する活動プログラムの学習についてのアンケート」結果より)

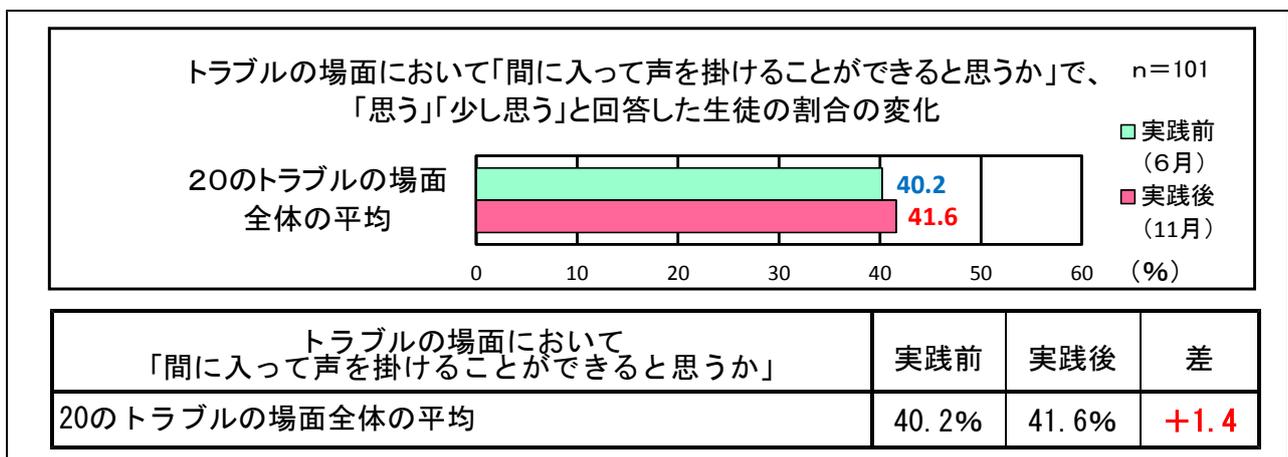


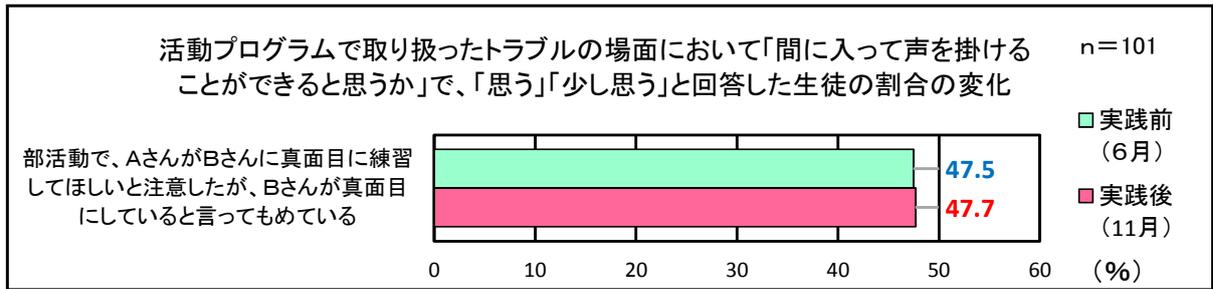
資料8 友達同士のトラブルを見たときの声掛けについての生徒の意識と行動の変化

- 「友達同士のトラブルを見たときに、声を掛けようと思心掛けていますか(意識)」と「友達同士のトラブルを見たときに、声を掛けていますか(行動)」の質問に対して、「いつもしている」「ときどきしている」と回答した生徒の割合が上がりました(資料8)。
- トラブル解決のスキル学習においては、授業で生徒にとって身近な具体的場面を用いた動画視聴や同じ場面でのシナリオを用いたロールプレイを行ったことにより、数値が好転したのではないかと考えます。また、高等学校においては、トラブル解決のスキル学習を1時間で取り扱いましたが、学習後にはおおよそ3人のうち2人の生徒が、友達同士のトラブルを見たときの声掛けを意識したり行動につなげたりしていることが分かり、学習の効果を確認することができました。

b 友達同士のトラブルの場面での声掛けの意識の変化

(「トラブルについてのアンケート」結果より)



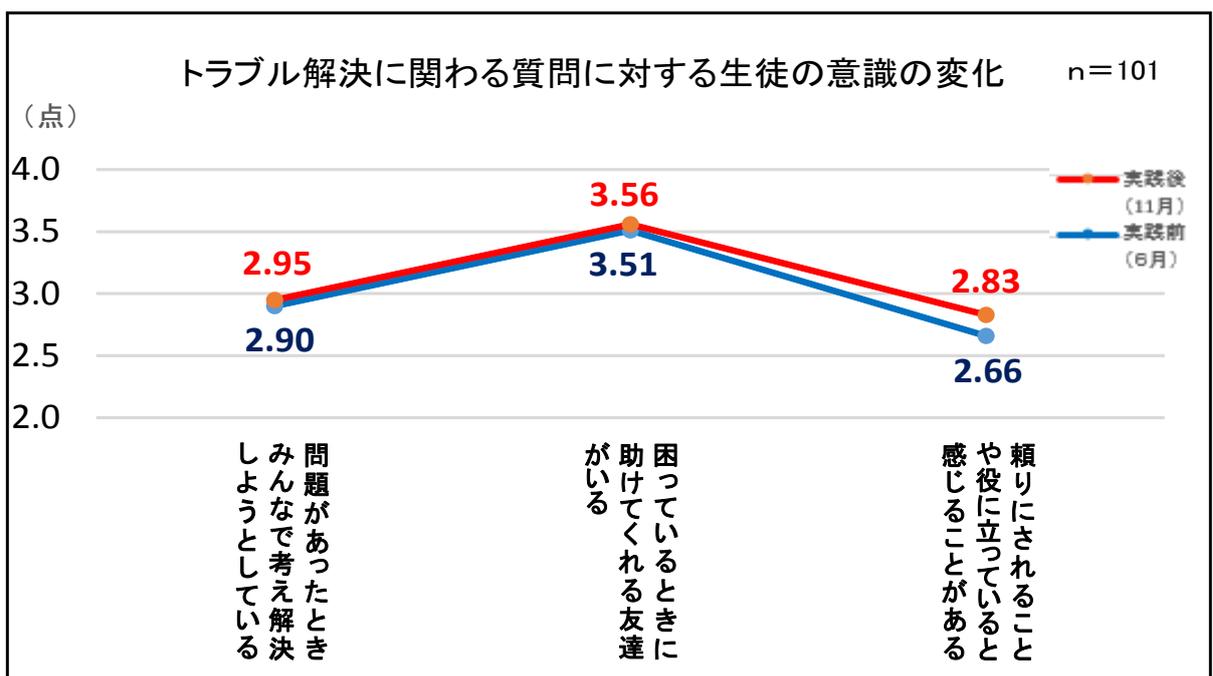


活動プログラムで取り扱ったトラブルの場面において「間に入って声を掛けることができると思うか」	実践前	実践後	差
部活動で、AさんがBさんに真面目に練習してほしいと注意したが、Bさんが真面目にしていると言ってもめている	47.5%	47.7%	+0.2

資料9 トラブルの場面において「間に入って声を掛けることができると思うか」で、「思う」「少し思う」と回答した生徒の割合の変化

- 20のトラブルの場面のうち「間に入って声を掛けることができると思うか」で、「思う」「少し思う」と回答した生徒の割合が1.4ポイント上がりました（資料9）。
- 活動プログラムで取り扱ったトラブルの場面が0.2ポイントの上昇（資料9）にとどまった理由として、生徒がトラブル解決の学習内容や1回のみでの学習で実践することに対して難しさを感じたのではないかと考えます。
- これらのことから、トラブル解決のスキル学習については、生徒が実際にトラブルの場面において間に入って声を掛けることができるように、生徒にとって身近なトラブルの場面を用いて、学習した内容を継続して取り扱っていく必要があると考えます。

c トラブル解決に関わる質問に対する生徒の意識の変化
（「がばいシート」結果より）



トラブル解決に関わる質問	実践前	実践後	差
問題があったときみんなで考え解決しようとしている	2.90	2.95	+0.05
困っているときに助けてくれる友達がいる	3.51	3.56	+0.05
頼りにされることや役に立っていると感じることもある	2.66	2.83	+0.17

資料10 トラブル解決に関わる質問に対する生徒の意識の変化

- トラブル解決に関わる全ての質問では、大きな数値の好転は見られませんでした（資料10）。
○このことから、活動プログラムで学習したトラブル解決のスキル学習が、より良い学級の雰囲気や友達との関係づくりと自己存在感の高まりにつながるように、学習した内容を授業後も継続して取り扱っていく必要があると考えます。

d 活動プログラム実践後の生徒と教師の感想

（「ピア・メディエーションに関する活動プログラムの学習についてのアンケート」結果より）

高等学校2年生

トラブル解決の方法はよくなったが、その中でも、友達と話を聞くことが大切だと思いました。

資料11 活動プログラム実践後の生徒の感想

- ・生徒は授業にも熱心に取り組むことができ、身をもって体験ができたようだ。日頃の生活に生かしたいとの声が多数あった。
- ・友達関係で怒りを感じた生徒が副担任に相談し、暴発する前にトラブルを自ら回避する行動をとることができた。
- ・高等学校では小学校や中学校と比較して、生徒が実際にトラブルに遭遇する場面が少ないため、あまり自分のこととして受け止められなかったかもしれない。しかし、メディエーターに求められる話の聴き方やトラブルの当事者になったときの「相手の話を最後まで聴いてから自分の言い分を言う」というルールは、日常でも大切なスキルであるため、高校生にはその点を強調した方がいいと感じた。

資料12 活動プログラム実践後の教師の感想

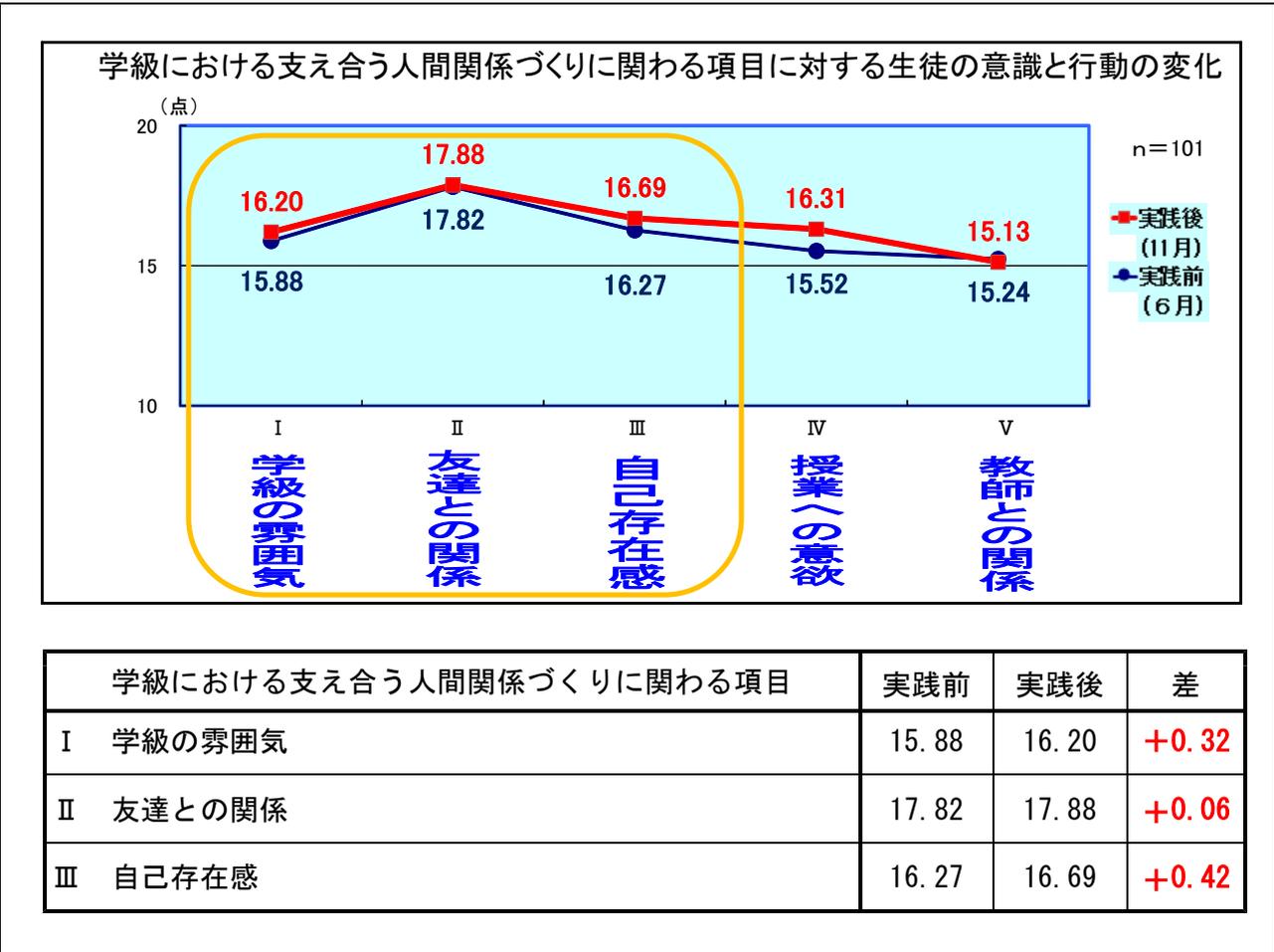
- 活動プログラム学習の前後で、生徒がトラブル解決の方法やトラブル解決のポイントを理解したことが分かりました（資料11）。また、より良い人間関係を築く上で、トラブルの場面だけではなく日常生活で人と関わるときの大切なスキルとしても、トラブル解決のスキルを学習する必要があるという教師の感想から、この活動プログラムが生徒の支え合う人間関係を築くために有効であることが分かりました（資料12）。

以上のことから、トラブル解決のスキル学習は、より良い学級の雰囲気や友達との関係づくり及び自己存在感を高めるために有効であり、トラブル解決に効果があったと考えられます。また、トラブル解決の効果をさらに高めていくために、学習した内容をトラブルの場面だけではなく日常の場面でも継続して取り扱っていく必要があると考えます。

【検証の視点Ⅲ】学級における支え合う人間関係づくりに効果があったか

a 学級の雰囲気、友達との関係、自己存在感についての生徒の意識と行動の変化

(「がばいシート」結果より)



学級における支え合う人間関係づくりに関する項目	実践前	実践後	差
I 学級の雰囲気	15.88	16.20	+0.32
II 友達との関係	17.82	17.88	+0.06
III 自己存在感	16.27	16.69	+0.42

資料13 学級における支え合う人間関係づくりに関する生徒の意識と行動の変化

○活動プログラムの実践前後の「がばいシート」の結果（項目別）を比較すると、着目した3つの項目の数値が上がりました（資料13）。活動プログラムの実践を通して、生徒が友達とより良く関わろうと意識したり、学級における自分を価値ある存在であると感じたりしていることが分かりました。このことから、活動プログラムが生徒の支え合う人間関係を築くために有効であると考えます。また、「がばいシート」の項目のうち本研究で着目した項目ではありませんが、「授業への意欲」が0.79ポイントと5つの項目の中で最も数値が好転したことから、活動プログラムが学級における支え合う人間関係づくりだけではなく、学習面においても有効であることが考えられます。

○このことから、活動プログラムを学校全体で積極的に活用することは、特に高等学校においては、学力向上や進路実現に向けた取り組みとしても意義があると考えます。